

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

**ボンヘッファー
ヒトラーを暗殺しようとした牧師**

2024年/アメリカ・ベルギー・アイルランド映画
配給：ハーク/132分

2025 (令和7) 年 11 月 15 日鑑賞 テアトル梅田

Data 2025-110

監督・脚本・製作：トッド・コマーニキ

出演：ヨナス・ダスラー/アウグスト・ディール/デヴィッド・ジョンソン/モーリッツ・ブライプトロイ/ナディーン・ハイデンライヒ/フルーラ・ポルク

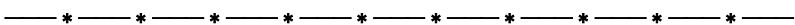
みどころ

『ボンヘッファー』だけでは何の映画かわからないが、サブタイトルを見れば本作は『ヒトラー暗殺、13分の誤算』（15年）（『シネマ 36』36頁）と同じく、ヒトラー暗殺の実行犯の伝記モノ！？そう思ったが、さて・・・？

私は2001年から弁護士と映画評論家の「二足のわらじ」を履いている。しかし、世界広しといえども、牧師とスパイの「二足のわらじ」を履いた男はきっとボンヘッファーがはじめて！彼がそうなったのは、神学生当時のアメリカ留学におけるハーレムでの黒人牧師との交流やジャズ音楽の影響が大きいようだが、米国における黒人差別とナチス・ドイツにおけるユダヤ人差別を結びつけて感じ取ったこの牧師の感覚はすごい。

しかも、反ナチス闘争が迫害と死を意味していた当時のドイツにおいて、本職の世界では「帝国教会」に抗して「告白教会」を設立したばかりか、ヒトラー暗殺計画にも参加したのだから、その勇氣には感服！もっとも、本作後半からラストにかけての展開は若干「タイトルに偽りあり」の面も・・・？

イエスキリストの処刑（磔刑）はユダの密告（裏切り）によるものだが、ディートリヒ牧師の処刑（絞首刑）は一体なぜ？今年のクリスマスに向けては、本作のパンフレットを勉強しながら、それをしっかり突き詰めたい。



■□■この人ダレ？本作は実話？知らなかったなアこんな計画！■□■

本作はアメリカ、ベルギー、アイルランド映画だが、その原題は『BONHOEFFER : PASTOR. SPY. ASSASSIN』。これは、BONHOEFFER（人物）、PASTOR（牧師）、SPY（スパイ）、そして ASSASSIN（暗殺者）という意味だ。しかし、ドイツ人の名前を持つボンヘッファー牧師って一体ダレ？そして、なぜその名前に続いて、スパイ、暗殺者

がタイトルとされているの？それは、邦題に『ヒトラーを暗殺しようとした牧師』というサブタイトルがついていることを見れば一目瞭然だが、そもそもボンヘッファー牧師って一体ダレ？本当にボンヘッファー牧師はヒトラーを暗殺しようとした人物なの？

『ヒトラーもの、ホロコーストもの、ナチス映画大全集—戦後75年を迎えて—』(20年)を出版した私は、ヒトラー映画をたくさん観ているし、トム・クルーズ主演の『ワルキューレ』(08年)、『シネマ22』115頁)やブラッド・ピット主演の『イングリシアス・バスターズ』(09年)、『シネマ23』17頁)を観れば、ナチス政権下のドイツでも大規模なヒトラー暗殺計画があり、現実に行われたにもかかわらず、未遂に終わったことがよくわかったが、そんな私も(私ですら)、ヒトラーを暗殺しようとしたボンヘッファー牧師のことは全然知らなかった。しかし、本作のチラシには「殉教から80年、正義と信念に生きた牧師ボンヘッファーの知られざる生涯」、「これは最大の罪か、最大の愛か。」、「ナチス・ドイツを率いるヒトラーを密かに暗殺する計画が進行していた—」の見出しが躍っているから、本作は間違いなくヒトラーを暗殺しようとしたボンヘッファー牧師を主人公にした“史実”を映画化したものだ。それがわかると、本作は必見！

■□■INTRODUCTIONは必読！“今の時代”こそ本作を！■□■

鑑賞後に購入した本作のパンフレットのINTRODUCTIONには次のとおり書かれているので、こりゃ必読！

殉教から80年——

独裁政治に逆らい、ヒトラー暗殺作戦に加担した牧師の壮絶な生き様を描く

第二次世界大戦下、ナチスに支配された教会や迫害を受けるユダヤ人を救うため、我が身を顧みず闘い続けた実在のドイツ人牧師ディートリヒ・ボンヘッファー(1906年-1945年没)。平和を祈る聖職者でありながら、彼はいかにしてスパイ活動に身を投じ、ヒトラー暗殺の共謀者になっていったのか？家族思いの青年であり、勤勉なキリスト者であり、そして抵抗運動の闘士と化して生き抜いた39年間の短くも濃厚な生き様を通して、英雄の知られざる人物像を浮かび上がらせていく。^20世紀を代表するキリスト教神学者の一人、と呼ばれるボンヘッファー。彼の死から80周年を迎えた今年、ついに日本公開が実現する！

悪を前に沈黙せず、真実を知り行動することの重要性を説く
メッセージが心に刺さる必見作!

「悪の前の沈黙は悪であり、神の前に罪である」行動なき信仰は、信仰ではない」
などボンヘッファーが残した思想や精神は、時を経た今も世界中に大きな影響を
与えている。本作でも様々な場面に散りばめられた言葉の一つ一つが強いエネル
ギーとなって私たちの心に触れ、映画への感動と余韻をさらに引き上げる。

全米公開時には、映画満足度サイトCinemaScoreで「A評価」、映画評論サイト
Rotten Tomatoesで映画鑑賞者の「満足度92%」を打ち立てた本作。「信仰生活」
と「社会生活」の融合を提唱した彼のメッセージは、紛争や分断や差別などあらゆる
事態にさらされる現代において、今、最も見習う価値がある注目作品である。

■□■ トッド・コマーニキ監督に注目！こりゃ実力者！ ■□■

本作のパンフレットには、本作の脚本を書き、監督・製作したトッド・コマーニキ監督の「DIRECTOR'S STATEMENT」と「INTERVIEW WITH TODD KOMARNICKI」があるので、これは必読！私はトッド・コマーニキ監督のことを全く知らなかったが、彼の経歴を読んでわかるのは、彼がクリント・イーストウッド監督、トム・ハンクス主演の『ハドソン川の奇跡』（16年）（『シネマ 39』218頁）の脚本を書いたということだけだ。しかし、小説家出身で脚本もたくさん書いている彼の経歴を見れば、なかなかの実力者らしい。しかも、1965年生まれだから、まさに今が働き盛りの実力者！「インタビュー」の中で彼は、「私が最初にディートリヒのことを知ったのは20代前半の頃、彼の著書『弟子としての代償』を読んでから」と述べているが、インタビューと「STATEMENT」を丹念に読むと、彼がなぜ本作の脚本を書き、監督し製作することになったのかがよくわかるので、こりゃ必読！そして、あれこれとヤバイ状況になっている「今の時代」こそ本作を！

■□■ ドイツ人俳優の起用は絶対！英語のセリフは仕方なし！？ ■□■

自ら本作の脚本を書いたトッド・コマーニキ監督が、ドイツ人のキャストを望んだのは当然。その結果、本作でディートリヒ・ボンヘッファー役を演じたドイツ人俳優、ヨナス・ダスラー氏を起用できたのは大正解！ディートリヒ以外にも、父親のカール・ボンヘッファー（モーリッツ・ブライブトロイ）、母親のパウラ・ボンヘッファー（ナディーネ・ハイデンライヒ）そして、本作で重要な役を演じているニーメラー牧師役をドイツ人俳優、アウグスト・ディールが演じたのも大正解だ。他方、『ワルキューレ』や『イングリシアス・バスターズ』では、トム・クルーズやブラッド・ピット等のハリウッド俳優が、ナチス将校役を英語で演じ、「ハイル・ヒトラー！」と英語で叫ぶ姿が不自然だったが、それは仕方がない。本作でも、そこには目をつぶらなければならない。もっとも、本作導入部では神学生として優秀だったディートリヒがアメリカに留学し、ニューヨーク市の名門ユニオン

神学校で学ぶ姿が描かれるが、そこで重要なのは、ディートリヒがアメリカ系アメリカ人の同級生フランク（デヴィッド・ジョンソン）と親交を深め、ハーレム地区のジャズ・バーでトランペット奏者ルイ・アームストロングと音楽セッションを楽しみ、故国ドイツにはない自由で新鮮な文化に感化されていくことだ。中でも、人種差別を受けるアフリカ系アメリカ人が日常生活のあらゆる場面で信仰を実践している姿が、ディートリヒの神学思想を一気に開眼させていくことだ。そして、そこでは、当然英語がたくさん使われているのは当然だ。

また、本作中盤でドイツ教会の未来を託されたディートリヒが、牧師仲間のジャコビ（インゴ・ブロッシュ）から「ドイツの教会を救うためにスパイとなってイギリスに行き、ベル司教に真実を伝えてほしい」との要請を受け、それを実行するストーリーが描かれるが、そこでも英語がたくさん使われるのは当然だ。

このように本作ではボンヘッファー牧師が英語を操れる人物だと設定したことによって、英語使用の不自然さがかなり軽減されていることもあり、英語のセリフは仕方なし!?

■□■「帝国教会」vs「告白教会」をどう考える?■□■

イエスキリストの最大の教えは愛。そして、それを象徴する言葉は「汝の敵を愛せよ」右頬打たれ左頬を出すだ。私が松山で中高時代を過ごした愛光学園は男ばかりの進学校だが、同時に聖トマス教会が運営するカトリック系の学校だったから、中学時代には宗教の授業があったし、油絵では宗教画を描いていた。また、単独での映画館鑑賞は禁止されていたものの、学校推薦の宗教関連映画は自由に鑑賞できたから、『十戒』（56年）、『ベンハー』（59年）、『キング・オブ・キングズ』（61年）等々の、当時の宗教関係の話題作を私はすべて鑑賞している。そんな私だから、中世ヨーロッパにおけるイスラム教に対する十字軍の攻撃の是非や、近世におけるカトリックとプロテスタントの対立、さらに宗教改革、ピューリタン革命等々のキリスト教内部における「対立の実態」もそれなりに知っているつもりだ。

第一次トランプ政権が誕生した後は、アメリカにおけるキリスト教「福音派」なるものの勢力の実態が再三紹介されているし、2023年10月のイスラエルvsハマス抗争後は、アメリカ内部におけるユダヤ人やユダヤ教の広がりの実態についても議論されている。このように、キリスト教が必ずしも本来の教えのように一枚岩で平和なものではなく、様々な対立があることは私もよく知っていたが、ナチスドイツの時代に「帝国教会」vs「地下教会」なる対立があったとは!?!しかも、「帝国教会」では「イエスキリストはアーリア人だった」と教え、教会にはナチスの象徴たる鍵十字の旗を掲げ、ヒトラーを神の子のように崇拜していたとは!?!そりゃ、ハチャメチャだ。

神学生としてアメリカに留学し、ハーレム地区で黒人牧師のフランクとの、またジャズ音楽でトランペット奏者のルイ・アームストロングとの親交を深めたディートリヒが故国ドイツに戻ってくるとすぐに突きつけられたのがそんな現実だったから、ディートリヒが

それに戸惑い、かつ反発したのは当然だ。その結果、彼はイギリスのベル司教（ヴィンセント・フランクリン）の後ろ盾を得て「告白教会」を設立した上、「私たちドイツの告白協会は帝国協会による偽りの教義を拒否する。ドイツ国家がユダヤ人を迫害するなら、告白協会は国家に抵抗する。」と大々的に宣言したからすごい。しかし、そのリスクは？本作の主演はタイトル通りディートリヒだが、本作で興味深いのは、かつてはナチズム支持派だったニーメラー牧師（アウグスト・ディール）が過去の考えを悔い改め、告白教会に賛同したことだ。しかし、ニーメラー牧師は「ヒトラー総統は神より偉大ではない」と表だって主張したため、逮捕されてしまうことに・・・

■□■スパイ就任と暗殺計画への参加をどう考える？■□■

『007』シリーズをはじめとして「スパイモノ」が面白いのは当然だし、それは世界共通のこと。そんな「スパイモノ」の人気作（シリーズ）を見れば、スパイにはさまざまな個性と適性があることがよくわかるが、牧師でありかつスパイでもあるという男はどこかにいた？

他方、私は弁護士と映画評論家という二足のわらじを履いているが、とりわけ日本のスパイ（忍者）（忍びの者）にあっては、表の顔は通常の商人でありながら、裏の顔はスパイ（忍びの者）というパターンが存在していた。しかし、古今東西を問わず、聖職者（牧師）とスパイという「二足のわらじ」を履いたのは、後にも先にも本作のディートリヒだけだろう。

もっとも、いくら「告白教会」の先頭に立った牧師として反ヒトラー闘争を続けていても、牧師のディートリヒにスパイとして一体何ができるの？それが私には大きな疑問だ。ところが、本作では何とディートリヒは聖職者でありながらヒトラー暗殺者のメンバーに参加するのでビックリ！しかし、本作に見るヒトラーの暗殺計画とは？そして、それに向けた各人の行動とは？

■□■ディートリヒの任務は？暗殺の実行犯は？■□■

『ワルキューレ』でも『イングリシアス・バスターズ』でも、用意周到に準備されたヒトラー暗殺計画のスリリングな遂行ぶりが最大の見どころだった。そのため、私は本作でも中盤からはディートリヒによるその任務の本格的遂行を期待したが、そこで描かれるディートリヒのスパイとしての活動は、ユダヤ人収監者を中立国スイスまで輸送する任務だったから、アレレ、アレレ。その任務の遂行中、ディートリヒは怯えるユダヤ人たちに自分たちの正体を明かし、「今ヒトラーがどんな蛮行をしているのか世界に真実を伝えてほしい」と望みを託し、目的地の国境で密かに彼らを解放したが、この任務の遂行は一体何の意味があるの？私には大いに疑問だ。他方、本作が描くヒトラー暗殺計画はディートリヒを実行犯とするものではなく、その実行犯は国防軍レジスタンスの同志ルドルフだ。つまり、ルドルフがヒトラーと対面する機会を得て、自爆によって暗殺を決行しようとするものだから、それに注目！

私が『ワルキューレ』や『イングリシアス・バスターズ』におけるヒトラー暗殺計画でビックリしたのは、暗殺の実行犯の“自爆”はハナから念頭になく、暗殺実行後の“逃走”が暗殺計画の中に組み込まれていたことだ。「先の大戦」当時の日本には神風特別攻撃隊があり、そこでは“自爆”を前提とする攻撃を是としていたが、さすがにヨーロッパの大国ドイツにはそんな“自爆思想”はないのだ、と感心させられたものだ。それに比べると、本作では明確に実行犯の“自爆”が当初から想定されていたが、その是非は？『ワルキューレ』や『イングリシアス・バスターズ』をみても、また『ヒトラー暗殺、13分の誤算』（15年）（『シネマ36』36頁）をみても、ヒトラーはよほど「運の強い人物」で、「暗殺を避ける星の下に生まれてきた人物」だったようだが、それは本作をみても同じだ。1944年7/20に暗殺の実行日を迎え、ヒトラーと対面し言葉を交わすドルフは、呼吸が感じられるほどに標的に接近、そしてついに自爆決行！という瞬間、ヒトラーは何かを察知したように急にその場を立ち去り、暗殺未遂という最悪の結果を招いてしまったから、アレレ、アレレ。そんな事態の中、ディートリヒはドイツを離れ、かつて学んだアメリカのユニオン神学校に逃亡することに。

■□■キリストの処刑はユダの密告によるものだが、本作の処刑は？■□■

私は本作のタイトルを見て、本作は『ヒトラー暗殺、13分の誤算』と同じようにディートリヒ牧師が暗殺の実行犯になるものとはばかり思っていたが、それは私の大きな思い違いで、後半から結末にかけては全く想定外の展開になっていくので、それに注目！

ドイツ国内でナチス反対闘争を行うのは危険で死と隣り合わせだが、逃亡先のアメリカで反ナチス活動をするのは自由。したがって、かつての留学先たるアメリカに逃亡し、フランク牧師らと再会したディートリヒは、アメリカに腰を落ち着けて「告白教会」の牧師として反ナチ構想を展開すればよいはずだが、本作に見るディートリヒの選択はそうではなく、逮捕覚悟でドイツに戻ることであったが、それは一体なぜ？

イエスキリストが「最後の晩餐」でユダの裏切りを予告したのは有名な話だが、キリストの処刑（磔刑）はキリストの弟子の1人であるこのユダの密告によるものだった。それに対して、本作ラストに見るディートリヒの処刑（絞首刑）はディートリヒ自身の意思で帰国し、予想通り逮捕されたためだ。しかし、ディートリヒは逮捕や処刑覚悟でなぜ帰国したの？今年のクリスマスに向けては、本作のパンフレットを読み込みながら、それをじっくり考えたい。

2025（令和7）年11月21日記